

第 7 回
「北方領土と私たち」作文コンクール
入賞作文集



(出航前のえとぴりか)

北方領土返還要求京都府民会議
京都府北方領土教育者会議

目次

1	発刊にあたって	-----	1
2	実施要項	-----	2
3	選考について	-----	3
4	入賞者一覧	-----	4
5	授賞式風景	-----	6
6	入賞作文	-----	7

最優秀賞

京都府知事賞	宮津市立栗田中学校	池 永	佳菜子
京都市長賞	京都市立伏見中学校	大 澤	未 希

優秀賞

京都府教育委員会教育長賞	京都府立須知高等学校	石 田	香 澄
京都市教育委員会教育長賞	京都市立嵯峨中学校	大久保	美 鈴
北方領土問題対策協会理事長賞	京都市立西京高等学校附属中学校		
		安 田	梨 沙
北方領土問題対策協会理事長賞	宮津市立宮津中学校	秋 田	瑠 南
北方領土返還要求京都府民会議会長賞	京都市立嵯峨中学校	細 川	彩 未
北方領土返還要求京都府民会議会長賞	京都府立鳥羽高等学校	松 榮	友 里
京都新聞社賞	京都市立伏見中学校	田 中	佑 奈
京都新聞社賞	舞鶴市立青葉中学校	吉 田	圭 佑
KBS京都賞	京都市立藤森中学校	吉 富	優 太
KBS京都賞	南丹市立園部中学校	川 本	杏 実

佳 作	京都市立大宅中学校	伊 藤	綾 香
佳 作	京都市立嵯峨中学校	永 見	は な
佳 作	京都市立伏見中学校	清 水	瑞 穂
佳 作	京都市立西京高等学校附属中学校		
		宮 島	萌
佳 作	京都市立嵯峨中学校	徳 舂	千夏子
佳 作	宮津市立宮津中学校	永 井	彩 花
佳 作	宮津市立日置中学校	一 色	栞 奈
佳 作	宮津市立養老中学校	小 島	慎 司
佳 作	京都府立鳥羽高等学校	近 藤	実 紀
佳 作	京都府立須知高等学校	林	沙

発刊にあたって

この「北方領土と私たち」作文コンクールもおかげさまで、今年度、第六回を迎えることができました。今年の応募点数は昨年比べて少し減りましたが、それでも府内全体で一四〇〇点以上に達しました。当然のように取り組んでいた学校や先生と、その御指導のもとで原稿用紙に向かって北方領土問題を考えてくれる中学・高校生が毎年千人以上おられるというのはとにかく嬉しい限りです。

特に今年目にとまったのは、北方領土に関わるさまざまな研修会に参加した生徒さんが、そこで学んだこと感じたこともふまえて作文にまとめてくれていることです。中には三年間継続して、主体的に学んで来られた生徒さんもおられます。いろいろな形で北方領土問題を学んで来られたので、その間にきつと友達同士や家庭でこの問題が話題にされているはず。これこそ、教育者会議が期待している姿です。

また、この冊子が発行される直後に、独立行政法人北方問題対策協会によって、「北方領土に関する全国スピーチコンテスト」が初めて東京で開かれます。京都府からも参加してくれませんが、そもそも京都府のようにいくつかの府県で作文コンクールを実施していることが、このスピーチコンテスト開催のきっかけになったようです。

外交交渉・領土交渉は国の役割ですが、社会科で学習するように政治を後押しするのが国民の世論です。この作文

コンクールやスピーチコンテストはその先頭を行くものにとらえていいのではないでしょうか。

今日、日露関係は必ずしも良好ではありませんが、経済面や文化面で新たな道はあるはず。並行して多くの生徒さんが書いてくれているように「北方領土は日本のものです」と主張し続けることが重要です。次代を担う中高生がこの問題と向き合い、考え、自分たちにできる一歩を踏みだしてくれることが、北方領土問題の解決に確実につながる道であると信じています。

作文コンクールがますます充実してきましたのは、各学校の御理解と御協力のおかげです。さらに今回も御後援いただきました独立行政法人北方問題対策協会、京都府、京都市、京都府教育委員会、京都市教育委員会、京都府中学校長会、京都市中学校長会、京都府市町村教育委員会連合会、京都新聞社、産経新聞社、KBS京都をはじめ関係者の皆様にも重ねてお礼申し上げます。

今後とも関係の皆様方の御指導と御支援をお願い申し上げます。

平成二十五年二月二日

北方領土返還要求京都府民会議

会長 近藤 永太郎

京都府北方領土教育者会議

会長 西田 三郎

平成24年度

第7回「北方領土と私たち」作文コンクール実施要項

- 1 趣 旨 京都の中学生や高校生が、北方四島の現実に関心高め、北方四島が歴史的な経過や国際法に照らして日本の固有の領土であることを正しく理解し、北方領土に対する関心高めを目的としてこの事業を実施する。
- 2 主 催 北方領土返還要求京都府民会議
京都府北方領土教育者会議
- 3 後 援 京都府・京都市・京都府教育委員会・京都市教育委員会
京都府中学校長会・京都市中学校長会
京都府市町村教育委員会連合会
(独立行政法人)北方領土問題対策協会
京都新聞社・産経新聞京都総局・KBS京都
- 4 テーマ 「北方領土と私たち」にかかわる内容であること(題名は自由)
- 5 募 集 (1) 対 象 京都府内の中学校・高等学校に在学している者
(2) 募集締切 平成24年12月7日(金)
(3) 作品規定 原稿用紙(400字詰)3枚以内
(4) 応募先 京都府北方領土教育者会議事務局
〒622-0051 南丹市園部町横田3-51
南丹市立園部中学校内 小森宛 TEL 0771-62-0222
- 6 審 査 主催者において選定した審査員により審査
- 7 表 彰 (1) 賞の設定
最優秀賞 2点・京都府知事賞・京都市長賞 各1点
優 秀 賞 10点・京都府教育委員会教育長賞 1点
・京都市教育委員会教育長賞 1点
・北方領土問題対策協会理事長賞 2点
・北方領土返還要求京都府民会議会長賞 2点
・京都新聞社賞 2点
・KBS京都賞 2点
入選・佳作 若干点
(2) 表彰式
平成25年2月2日(土)
(北方領土返還要求京都府民大会会場にて表彰予定)
- 8 その他 ・応募の際は別紙の応募一覧表を添えて下さい。

問い合わせ先	京都府北方領土教育者会議事務局 (南丹市立園部中学校内 小森 誠)
	0771-62-0222

第7回「北方領土と私たち」作文コンクールの選考について

1 応募の状況

応募校	18校	応募点数	1,430点
-----	-----	------	--------

2 選考委員と選考基準

(1) 選考委員会の構成

氏名	所属・役職
松本和久	京都府北方領土教育者会議顧問 (京都府立須知高等学校校長)
西田三郎	京都府北方領土教育者会議会長 (南丹市立園部中学校校長)
宮田功	京都府北方領土教育者会議副会長 (京都市立嵯峨中学校教頭)
小森誠	京都府北方領土教育者会議事務局長 (南丹市立園部中学校教頭)
奥村光太郎	京都府北方領土教育者会議事務局次長 (京都市立伏見中学校教諭)
島本由紀	京都府北方領土教育者会議運営委員 (京都市教育委員会学校教育課主席指導主事)
福森徹也	京都府北方領土教育者会議運営委員 (京都市立藤森中学校教諭)
能登英夫	北方領土返還要求京都府民会議副会長
野村啓介	北方領土返還要求京都府民会議事務局長
呉川昌弘	北方領土返還要求京都府民会議事務局次長
藤田明美	北方領土返還要求京都府民会議事務局次長

(2) 選考基準

- ・北方領土について正しい認識や理解に基づき記述されているか。
(正しい認識・理解の視点)
- ・北方領土問題に関心を持ち、主体的な姿勢で学ぼうとしているか。
(主体的な態度・関心・意欲の視点)
- ・北方領土問題の解決に向けて自らができることを考え、取り組もうとしているか。
(将来への展望の視点)
- ・上記の視点を持ち、読み手に共感を与える内容であるか。
(啓発資料としての価値の視点)

3 選考の結果

- ・別紙の入賞者一覧のとおり

4 選考を終えて

- ・このコンクールも7回目を迎え、府内の中学校・高等学校にもかなり定着した感がある。関係機関ならびに各校の先生方の御理解と御協力に深く感謝したい。
- ・作文の内容をみると、最近の領土問題に関わる報道や北方領土問題について学習した内容を多様な感性でとらえ、自分の意見を明確に表したものが多く見られ、北方領土問題に対する理解の広がり、深まりがうかがえた。

第7回「北方領土と私たち」作文コンクール入賞者

氏 名	学 校 名	学 年
最 優 秀 賞 （京都府知事賞）		
池 永 佳 菜 子	宮津市立栗田中学校	2 年
最 優 秀 賞 （京都市長賞）		
大 澤 未 希	京都市立伏見中学校	2 年
優 秀 賞 （京都府教育委員会教育長賞）		
石 田 香 澄	京都府立須知高等学校	3 年
優 秀 賞 （京都市教育委員会教育長賞）		
大 久 保 美 鈴	京都市立嵯峨中学校	2 年
優 秀 賞 （北方領土問題対策協会理事長賞）		
安 田 梨 沙	京都市立西京高等学校附属中学校	2 年
優 秀 賞 （北方領土問題対策協会理事長賞）		
秋 田 瑠 南	宮津市立宮津中学校	3 年
優 秀 賞 （北方領土返還要求京都府民会議会長賞）		
細 川 彩 未	京都市立嵯峨中学校	2 年
優 秀 賞 （北方領土返還要求京都府民会議会長賞）		
松 榮 友 里	京都府立鳥羽高等学校	1 年
優 秀 賞 （京都新聞社賞）		
田 中 佑 奈	京都市立伏見中学校	2 年
優 秀 賞 （京都新聞社賞）		
吉 田 圭 佑	舞鶴市立青葉中学校	3 年
優 秀 賞 （KBS京都賞）		
吉 富 優 太	京都市立藤森中学校	3 年
優 秀 賞 （KBS京都賞）		
川 本 杏 実	南丹市立園部中学校	1 年

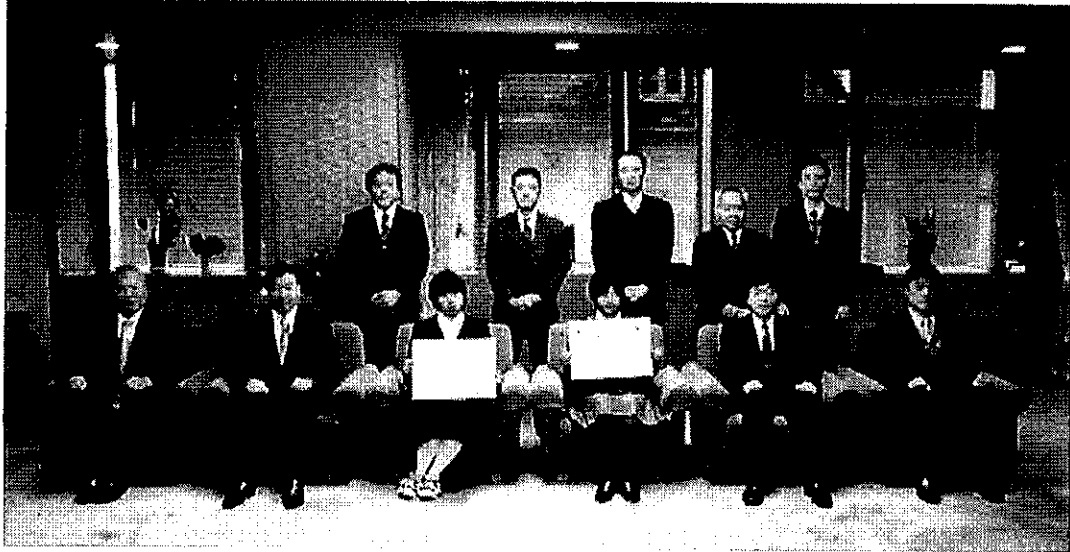
第7回「北方領土と私たち」作文コンクール入賞者

	氏 名	学 校	学 年
佳 作	伊 藤 綾 香	京都市立大宅中学校	3 年
	永 見 は な	京都市立嵯峨中学校	1 年
	清 水 瑞 穂	京都市立伏見中学校	2 年
	宮 島 萌	京都市立西京高等学校附属中学校	2 年
	徳 舛 千 夏 子	京都市立嵯峨中学校	3 年
	永 井 彩 花	宮津市立宮津中学校	3 年
	一 色 栞 奈	宮津市立日置中学校	3 年
	小 島 慎 司	宮津市立養老中学校	3 年
	近 藤 実	京都府立鳥羽高等学校	3 年
	林 沙 紀	京都府立須知高等学校	2 年
入 選	小 山 優 香	京都市立伏見中学校	2 年
	得 野 遊 画	京都市立嵯峨中学校	3 年
	諫 本 桃 子	京都市立伏見中学校	1 年
	片 山 穂 香	京都市立西賀茂中学校	3 年
	上 本 真 帆 子	京都市立勸修中学校	2 年
	清 水 ひ かる	南丹市立殿田中学校	2 年
	臼 井 夢 乃	大山崎町立大山崎中学校	1 年
	三 野 沙 英 子	宮津市立養老中学校	3 年
	長 谷 川 美 苗	南丹市立園部中学校	3 年
	大 槻 真 由	京都府立園部高等学校附属中学校	1 年

最優秀賞などの授賞式

京都府知事賞・京都府教育委員会教育長賞の授賞式

平成25年1月16日 京都府庁



山田啓二京都府知事、田原博明京都府教育委員会教育長から賞状が授与されました。

京都市長賞・京都市教育委員会教育長賞の授賞式

平成25年1月22日 京都市役所



門川大作京都市長、生田義久京都市教育委員会教育長から賞状が授与されました。

入賞作文

最優秀賞（京都府知事賞）

一つの行動が大きな力に

宮津市立栗田中学校
二年 池永 佳菜子

「中学生でも領土問題に取り組むことができる！」こんな思いが私の心に芽生え始めた。

領土問題というと、「北方領土問題」も大きな問題の一つであるが、尖閣諸島や竹島問題も重要な問題だと私は考える。尖閣諸島問題では、テレビで繰り返し放映された中国での一方的なデモを見て、多くの日本人に不満や怒りがこみ上げたに違いない。

しかし、互いの国の思いが食い違った結果が大きな問題へと発展する今回の場合、戦争が起きないかという恐怖が心の奥底に広がったものの、この時点では、私自身の領土問題に対する意識はあまり変わらなかった。

そんな中、私はこの夏に滋賀県で行われた近畿の中高生の研修会に参加して、北方領土に詳しい先生方からいろいろ話を聞いた。そして、日本とロシアの一步進んだ現状と対照的に悔しい現実をいろいろと学ぶ中で、「領土問題」という言葉に深い意味を感じ始めた。

特にその場で見た映像の中に、近畿の高校生・中学生が四島を訪問し、交流するといった事業があり、嬉しかったことは、北方領土に住むロシア人と日本の青年達が一緒に笑っている姿があったということだ。この様子を見て、私も「北方領土を生目の目で見たい」と強く思うようになった。

この交流は、四島を訪問する際に必要になるビザをなくした「ビザなし交流」というもので、短い時間であるが、境界線をなくしたことで両国の中高生が交流でき、北方領土を考えるきっかけともなるはずだ。そして、この活動は必ず北方領土問題を前進させるために役立つだろう。

一方、今回の研修で私自身の課題も見えてきた。研修会の中で気づいたこと、それは、私自身が日本に住んでいるのに北方領土の歴史、ロシア人のことや今の状況など知らない事象が多過ぎることである。ほとんどが初めて見たり聞いたりすることであり、そこで改めて私自身の北方領土問題に対する認知度の低さを知ることになった。

私は、この二日間の研修を通して、考えるべきこととあり余るほど見つけることができた。そして講演や説明、社会科の授業など、ほんの短い時間だったけれど、一つの行動が大きな力になることを信じていることができた。

私は今、ねばり強く築き上げた信頼関係をこわすことは一瞬であるように思うので、よけいに領土問題の解決には、両国の信頼関係を丁寧丁寧に築くことが大切であると思うようになってきた。

だからこそ、私は北方領土問題を解決するために、私自身の思いをきちんと伝え、広く発信していこうと思う。

最優秀賞（京都市長賞）

身近な人に『北方領土問題』を伝えよう

京都市立伏見中学校
二年 大澤 未希

私が北方領土問題を詳しく知ったのは、今年の八月に滋賀県で行われた北方領土研修に参加したことがきっかけでした。それまでの私が北方領土問題について知っていたことは、四つの島の名称とロシアが占拠しているということぐらいでした。ですから、北方領土問題なんて私とは関係がないことだ、と思い込んでいました。つまり、北方領土問題は私にとってとても遠い存在だったのです。

しかし研修を受けているうちに、自分がいかに認識不足だったかということがわかってきました。北方領土問題とは、自分と関係がないどころか、すべての日本人にとって大変重要な意味を持っているということに気が付いたのです。

まず、歴史的に見るならば、北方領土は遠い昔から国際的にも認知された日本固有の領土です。古くから日本人が住み、漁業を中心に平和に暮らしていたのです。その島を武力で奪い取ったのが当時のソビエト連邦です。しかもソビエト連邦は太平洋戦争が終結した八月十五日以降に侵攻を開始しています。こんな不当なことが許されていいのでしょうか。ソ連の兵士に銃をつきつけられて島を追われた島民の皆さんの気持ち想像すると、私は本当に胸が痛みます。とりわけ小さな子ども達の恐怖

はいかばかりだったでしょう。私はソビエト連邦の行為はあまりにも不当で卑怯だと思えます。

次に、北方領土の価値について考えてみます。これまでの私は北方領土について無関心だったので、北方領土の価値など考えたこともありませんでした。しかし研修のなかで、北方領土には大きな価値があるということがわかってきました。北方領土周辺の海は水産資源の宝庫です。また、周辺海域には様々な地下資源が埋蔵されている可能性もあるそうです。こんなにも素晴らしい北方領土なのに、どうして国民の関心はなかなか盛り上がりがないのでしょうか。私はその大きな原因は、国民の多くが北方領土についてあまり学んでいないということにあると思います。つまり大人も子どもも北方領土についての知識をあまり持っていないのです。

しかしこれを克服する方法はあります。私が北方領土研修でいただいた多くの資料を家のテーブルに置いておいたところ、家族のみんなが手にとって読んでくれました。そして家族みんなが北方領土問題について話しあうことが出来ました。おかげで私の家族の北方領土問題についての理解は一気に深まりました。このことは、何かのきっかけがあれば、国民の北方領土問題についての理解は進むということを示しています。私はこれから研修で学んだことを親戚や友人など身近な人に伝えていこうと決意しています。そして国民皆が北方領土に強い関心を持つことにより、北方領土を取り返す日がきっとやってくることを確信しています。

優秀賞（京都府教育委員会教育長賞）

共存共栄の道を探ろう

京都府立須知高等学校
三年 石田 香澄

「北方四島は、ロシアによって不法占拠された日本の領土である」

授業での板書や配布された資料あるいはインターネットからの情報など、北方領土問題に関する資料には必ずと言っていいほど目にする文章だ。

不当に奪われた領土なのだから、堂々と返還を主張すればいいと言ふのは当然である。だが、もう一歩進めて北方領土を「ロシアと共に繁栄させる島」と考えることはできないだろうか。ただし、日本の領土である限り統治権は日本が有するべきである。北方四島から得られる利益を、日口で分かち合う代わりに、ロシアからも協力を受けるといった相互協力関係は結べないだろうか。これは、私の理想であり、実現の可能性も皆無ではないはずだ。いずれにせよこうした外交交渉では、互いの理解と誠実さが欠かせない。

そして、それは我々日本国民にも求められているものである。北方領土問題に関心を抱く国民が日本全体のどの程度なのかは知らないが、直接関係する人は少ないため、そう多くないのではないかと思う。しかし、北方領土問題に関する取り組みは、意外に多く、それも幅広く行われている。例えば、国民の関心や志気を高めるために、「北方領土の日」が二月七日に制定されている。こ

の二月七日は、一八五五年伊豆の下田で「日露通好条約」が結ばれた歴史的な意味を持つ日であり、日本の主張の正当性を象徴する日でもある。毎年この日には東京で、北方領土返還要求全国大会が開催され、全国各地においても大会やパネル展キャラバン活動などが行われ、さらに返還実現のための署名活動も実施されている。

ビザなし交流も、我が国の主張を伝えると共に、四島住民に日本の実情や日本人の考えた方を理解してもらうための良い機会である。一昨年、本校にも四島の高校生が交流のために訪れた。双方にとって良い相互理解の場となった。毎年こうした様々な取り組みが行われているおかげで、北方領土問題に関心を持つ人は明らかに増えていくはずだ。今後、日口の将来を担う高校生のサミット会談のようなものもあってもよい。

日本国民が積極的な姿勢でいることはとても大切だ。多くの人々の理解と協力があつてこそ質の良い返還要求運動ができ、質の良い運動には必ず成果がついてくるものだ。国民の強靱な意志こそが、北方四島の将来を拓くにちがいない。

日本の北方領土問題に対する主張はまだまだ弱いと言われている。良く言えば、丁寧かつ慎重であるとも言える。相手側に過度な敵意を抱くことも、抱かせることもあつてはならない。あくまで平和条約の締結を最終目的とした丁寧な外交が必要である。丁寧かつ慎重でありながらも日本側の意思をしっかりと主張をすること、そして日本国民が自分達の意思を最大限アピールすること、問題解決の兆しは見えてくると思う。

「ロシアによって不法占拠された島」から「ロシアと共に繁栄させる島」になることを願う。

優秀賞（京都市教育委員会教育長賞）

私達にできること

京都市立嵯峨中学校
二年 大久保 美鈴

「北方領土」、この言葉を耳にするだけで、もどかしい気持ちになる。二〇一二年の七月、ロシアのメドベージェフ首相は、日本の領土である北方領土の国後島に突然上陸し、北方領土はロシアのものだと主張した。日本は上陸を未然に防げなかった。なぜなら、世に言う「北方領土問題」があり、日本の北方領土がロシアに約七十年間も不法に占領されているからである。私は、悔しさと同時に何もできないもどかしさを強く覚えた。

そこで、私はこの問題について詳しく知るために「少女北方領土研修」に参加した。そして、研修を通して北方領土の歴史や現在の様子などを知り、北方領土返還への思いを強くした。北方領土はロシアのものではない。国際法的にも歴史的にも間違いなく日本のものだ。

もし、あなたの大切な宝物が、ある日突然に誰かに奪われ、「これは元々自分のものだ」と主張されたら、どんな思いをもつだろうか。きつと怒りや悲しみ、悔しさに打ち震えるだろう。ロシアは終戦直後に私達の大切な土地である北方領土を占拠し、当時の島民だった日本人を追い出した。「家・島・故郷」を突然に、失った島民の方の怒りや悲しみ、悔しさは如何ばかりであったことか。島民の方は、それからずっと返還運動を続けてこられた。しかし、現在は元島民の高齢化という壁に直面す

るようになってきた。約一万七千人だった島民の人口は、二〇一一年度には、七二六〇人となり、実に一万人の方を失った。このままでは、元島民の方は減り続け、世の中から「北方領土」という文字が消えかねない。

ならば、日本人一人一人が北方領土問題により真摯に向き合っていけば良いのではないか。具体的には、この問題についての興味関心を抱き、正しい知識を得ることであり、さらに、自分の意見を発信していくことが求められていると考える。また、ロシアと円滑に協議が進むように「ビザなし交流」などを積極的に推進し、北方領土に住むロシアの人々と理解し合うことも必要だろう。中学生でもできることはたくさんある。私のように北方領土研修に参加することができなくても、インターネットや本で、この問題やロシアの文化について調べるなど、すぐにできることで構わない。元島民の方が生存されていて、この問題が風化していない今こそ、日本人全員が力を合わせて、ひとつになるべきなのではないだろうか。一人一人が返還への強い思いをもち、ロシアの人々と理解を深めていけば、日本政府の背中を押すエネルギーとなつて交渉を支え、念願の返還につながるのだ。

今や北方領土は、日本人にとってもロシア人にとっても大切な故郷となつているので、日本人とロシア人が、返還された北方領土で共生することが、私はお互いの幸福な状況だと考えている。笑顔が溢れる日をつくるために、強い思いでこの運動を続けていく。これこそが日露双方の円満な解決への糸口になると私は信じている。

優秀賞（北方領土問題対策協会理事長賞）

北方領土と私たち

京都市立西京高等学校附属中学校
二年 安田 梨沙

北方領土問題と聞いても、なんとなく知っているが、詳しいことは知らないという人がほとんどだろう。それが北方領土問題の現実だ。私は北方領土返還に向けて、三つのことが必要だと思う。

まず一つ目は、この問題を多くの人に知ってもらうことだ。最初に書いたように、北方領土問題を詳しく知っている人は少ないと思う。昔、北方領土に住んでいた人たちはほとんどなくなっていく。このままでは、問題は風化していく一方だ。そこで、その人たちから北方領土についての話を聞き、そして語り継いでいくことが一番大切だと思う。戦争を知らない若い人たちがこの問題について知る機会を作り、一人一人が真剣に考えるようにすることはできないだろうか。私たちもこのことを他人事だと思っただけではいけないと思う。

二つ目に、あきらめずに粘り強く交渉していくことが大切だと思う。署名を集めたりするなど、小さなことからも行動することに意味があるのではないだろうか。でも、ただ北方領土を返せというだけではいけないと思う。なぜならば、北方領土は今、ロシアの人々の故郷でもあるからだ。昔日本がロシアにされたように、北方領土を無理矢理奪って、そこに住む人を追い出すということは、ロシアの人々に、昔の日本人と同じ思いをさせる

ということになる。日本とロシアの両方の故郷である北方領土を、どちらの国も納得できるように返してもらわないために、何度もあきらめずに話し合いをしなければならぬと思う。私は北方領土に両方の国の人々が一緒に住むということもいいのではないかと考えた。いろいろな方向から交渉をすることが大切だ。

そして最後に、北方領土に現在住んでいるロシアの人と交流することが必要だと思う。現地の人と交流することで、北方領土の現状やその人々の思いなどを知ることができると思う。日本は日本で、ロシアはロシアでそれぞれ北方領土についての考え方も違うと思う。直接交流して触れ合ったり話し合ったりすることで、日本とロシアは友好的な関係を築いていけるのではないだろうか。最終的な目標は北方領土を返還してもらいたいことだが、まずはお互いの立場などをしっかりと考え、友好を深めていくことが問題解決への第一歩だと思う。もっと他国の力なども借りて、積極的に話し合おうとする姿勢が必要だと思う。

現在日本とロシアの人々両方の故郷となっている北方領土の問題は、とても複雑なものだ。しかし、長い時間がかかっても、両国が納得できる結論を出してほしい。そして、若い人達がこの問題をきちんと理解して、北方領土は日本の領土だと自信を持って言えるような未来になつてほしいと思う。私自身も、これからの担う一人としてできることがないかを探したい。

優秀賞（北方領土問題対策協会理事長賞）

北方領土返還に向けて

宮津市立宮津中学校
三年 秋田 瑠南

根室沖にある北方領土。それは一八五五年の日露和親条約により日本となった島々だ。だが、一九四五年八月十八日、ソ連軍の侵攻が始まり、九月二日のアメリカ戦艦ミズーリでの降伏文章調印後の九月三日に齒舞群島を占領してから、今もまだロシアが不当に占領している。福岡県や千葉県と同じ程度の日本固有の領土が他国の実効支配下にあるというのは、主権を持つ国家としてとうてい許せるものではない。国後島や択捉島は、その一つの島だけで、沖縄県の面積を軽く超えているのである。また領土、領海だけでなく、豊かな海洋資源なども同時に奪われている。

北方領土の問題は、決して私たちと無関係ではない。日本は、北方領土以外に竹島でも領土問題を抱えている。ましてや、日本が実行支配している尖閣諸島や、中には現実に沖縄や対馬といった日本人の住んでいるところを自国領と主張している国さえある。このように考えると、すべての領土問題はつながっていることになる。だから一箇所であっても、一平方メートルの土地であっても、日本の領土を曖昧にしたり他国のものと認めてしまえば、他の領土問題にも悪影響を与えるのではないかと思う。領土問題においては、絶対に譲歩することは許されない。それこそ、ある首相経験者の口癖であった「友愛」

だけであってはならないのだ。自国の考えや基本方針、根拠を相手にはつきりと示した上で、交渉に臨まなければならぬ。それには、国民も領土問題に強い意識を持たなければならぬ。

毎年、北海道の中学生か高校生が政府を訪れ、総理に北方領土について請願書のようなものを渡しているという話をインターネットで見た。しかし、今年は、忙しいという理由で、面会することができなかつたとネットのニュースは報じていた。このことは、政府が北方領土への意識が低いと言われても仕方ないことだと思う。

北方領土は、歴史的にも国際法的にも日本の領土であるという事は、疑いようのない事実である。京都は、日本の中程にあり、北方領土からは遠く離れている。また、竹島や尖閣諸島からも遠い。それだけに国境や領土という観念があまり感じられないと思う。それは、京都だけのことでないのだから。だからこそ、国民の関心を高めることが重要だ。

そして何よりも、早期返還を実現することが大切である。ロシアが北方領土の埋蔵資源、メタンハイドレードなどの開発を始めたり、交通網整備を本格的に始めれば、返還はますます難しくなっていく。国際的にも、ロシアが開発しているクリル諸島という認識が広がると考えられる。ロシアと政治的な交渉ができるのは政府だけである。国民も声を挙げ、ロシアにその意思を示さなければ交渉にすらならない。

優秀賞（北方領土返還要求京都府民会議会長賞）

北方領土返還と国の平和

京都市立嵯峨中学校
二年 細川 彩未

私は今年、「少年少女北方領土研修」に参加した。その時、北方領土についての知識は少なかつたが、そのときもらった資料の「北方領土」「返還実現」などの言葉を目にして、「今、北方領土では何が起こっているのだろう。」そんな疑問を抱えながら、北方領土の現状についてたくさんのお話をしていた。

その話の中でも、特に印象深かつたのは、「現在、日本の領土である北方領土をロシア人が占領している。」という話だ。私はこの事実を聞いたとき、驚きと怒りを隠せなかつた。なぜ、私たちの領土を好き勝手に使われ、私たちの領土だということを否定するのか。

きつかけとなる可能性の高い意見が一つある。それは、「考えの食い違い」だ。第二次世界大戦後、交渉の中でソ連が千島列島を占拠した。その中でソ連は千島列島に北方領土も含まれていると思ひ込んだ。このようなことから、私は両国の話し合いが、まだ不十分だったのでないかと思つた。結果の飲みこみ方を少し間違えただけで、現在では大きな問題になつてしまつたのだ。

日本とロシアの間には、まだ平和条約が結ばれていない。そこで私は、日本とロシアで友好的な関係を築けるような取り組みを行い、お互いを理解しあうことが大切だと思つた。その取り組みとは、日本語の講師を島に派

遣し、ロシア人に日本語を教え、日本とロシア、お互いの文化を伝えあい、一緒に楽しむなど、まずは私たち日本人が、事の大きさ、重大さをしっかりと理解し、北方領土を活気ある「ふれあいの場」のような存在にするのはどうだろうと私は考えた。

そのように共同で暮らすという考えもあつたが、現在、北方領土はロシアに占拠されたままだ。これ以上のロシア人たちの行動を食い止めるために、返還実現を第一に考える必要がある。

今、北方領土返還運動を日本政府や北海道の市民団体などが行つてはいるが、ロシア側に動きはない。訴えが足りないのかもしれないと私は考える。今、一番必要なのは政府でもなく、北海道民でもなく、私たち国民の力だと考える。豊かな自然に恵まれた日本の誇れる領土、北方領土。それをめぐる日本とロシアの間に「平和」を取り戻し、日本全体の心をついに、北方領土を返してほしいという心からの思いをロシアに訴えたい。そして一日も早く北方領土が返還されたとき、日本とロシアにも「平和」が戻ることを願つてはいる。

優秀賞（北方領土返還要求京都府民会議会長賞）

北方領土と私たち

京都府立鳥羽高等学校
一年 松榮 友里

最近、何かと大きわざになる尖閣諸島の問題に比べ、同じ領土問題であるのに、北方領土問題はあまりニュースで聞かない。

尖閣諸島には人が住んでいないのに対し、北方領土の島々は、日本人が住んでいたのに追いだされ、今はロシアの人が住んでいる。再び住むことはもちろん、そこに残してきた先祖のお墓に参ることも、自由にできない。今まさに、そのことに苦しんでいる人、生きていくうちに、もう一度ふるさとに戻りたいと日々願いながら年々歩いていっている人たちが現実にも今の日本にいるのに、なにか当事者以外は「他人事」となっているような気がする。北海道に住んでいる人たちにはもつと身近な問題かもしれないが、少なくとも京都に住む私たちは、どこか、教科書の中の世界のような遠い問題に思ってしまう。

最近の尖閣諸島の問題では、中国人が日本人を攻撃したり、決してそれ自体はいい方向にすすんでいるとか正しい解決に向かっていっているとは考えられない。きちんと冷静に話がすすめられなくてはおかしいと思う。しかし、前石原都知事の「東京都で買いとる」という発言をきっかけに、日本人皆が尖閣諸島の問題を毎日のように耳にし、だれもが少しはその問題について考えもしたと思う。そして国が動くことになった。そんな簡単な話ではない

かもしれないが、尖閣諸島の問題は領海の漁業権とかがメインになると思うので、ふるさとを想いながらふるさとに戻れない人々の存在というものはない。

「好き」の反対語は「嫌い」ではなく「無関心」だという言葉がある。大きな事故や災害の被害者が、そのことを思い出すのはつらいけど、皆から忘れ去られてしまふのはもつとつらいという意見も耳にする。直接自分個人に利害があるわけでもないのに、領土問題に怒り、大きわざする中国人は何を考えているのかと思うことがある。一方で、大多数の国民が、自国の領土がのつとられているのに無関心で、何の感情も持たずに生活を送る日本のことを、ロシアの人々はどうのように見ているのだろうか。

北方領土問題は歴史上のできごととして、過去形で語られてはいけないと思う。ふるさとを追い出された人たちが、今、私と同じ時間に現実に生きている世の中で起きる問題は、皆が一生懸命考えても、うまく解決できるとは限らない。しかし、苦しむのは一部の当事者だけで、ほとんどの人が無関心という状態からは何も生まれえない。北方領土の問題が、日本人一人一人の心の中に存在し続け、いろいろな場所で自分たちの国の問題として意見がかわされていくことが、まずは第一歩ではないだろうか。

優秀賞（京都新聞社賞）

平和的に解決するために

京都市立伏見中学校
二年 田中 佑奈

日本の最北端の島、択捉島を含む北方領土。私は北方領土が古くから日本の領土であったということ最近になって知りました。これまでの私は、日本が北方領土を発見したのはそれほど昔のことではないと思っていたのです。北方領土の存在は、実は十七世紀の始めには知られていました。そして昭和二十年までは、一万五千人を超える日本人が住んでいました。そこでは人々が美しい自然に囲まれて、楽しい毎日を過ごしていたに違いありません。しかしその人々がいきなり島を追われることになりました。ソ連による不法占拠が行われたからです。その後ソ連はロシアに変わりましたが、今なお北方領土は占拠されたままです。

それでは北方領土を返還してもらうためにはいったいどうすればよいのでしょうか。中には「奪われたものは奪い返せばよい」と考える人がいるかもしれませんが。しかし私はこの問題は平和的に解決する必要があると思います。ソ連によって北方領土を追い出された当時の島民は、家も生活も何もかも失って絶望的な気分になったはずで、昔、テレビで元島民の方が故郷に戻れず、お墓参りもできないとつらそうに語っておられたことを思い出します。今、北方領土にはたくさんの方々が住んでい

ます。島を強引に奪ってしまえば、現在北方領土に住んでいるロシアの人々にも同じようなつらい思いをさせることになりません。だからこそ平和的に解決する方法を考えることが大切だと思うのです。

それではこの問題を平和的に解決するためにはどんな方法があるのでしょうか。私なりに考えた結果、二つの答えにたどりつきました。

一つ目は「これまでの考え方にとらわれてはならない」ということです。北方領土問題があることから、私たち日本人はロシアに対して悪い印象をもつてしまいがちです。その印象にとらわれて「ロシア人は悪い人だ」と決めつけてしまうと平和的に解決することが難しくなります。物事は色々な見方ができます。「百聞は一見にしかず」ということわざがあるように、一部の情報だけを鵜呑みにしてはならないと思います。

二つ目は、国民全員が北方領土について詳しく学ぶということです。北方領土がかけがえのない領土なのだということを主張するためには、日本人全員が十分な知識をもつておくことが不可欠です。

確かに北方領土問題の解決は簡単ではないでしょう。それでも私は北方領土をどうしても取り返したい。そのために、私は世界中から多面的な考え方を学んでいきたいと思っています。それこそがこれからの社会を担う私たちに課せられた責務だからです。私はそう遠くない未来に「北方領土は日本固有の領土です」と何の迷いもなく言える日がやってくるということを、心から確信しています。

優秀賞（京都新聞社賞）

領土問題の解決に向けて

舞鶴市立青葉中学校
三年 吉田 圭佑

最近、「我が国固有の領土を」というフレーズをニュースなどでよく耳にする。「固有の領土」とはどのような意味だろうと疑問に思い調べてみたところ、それは、「一度も他の国の領土となつたことがない領土」ということらしい。そこで、我が国固有の領土でありながら、現在、ロシアに不法占拠されている北方領土を取り上げ、領土問題の解決に向けて僕の考えを述べたい。

北方領土は、江戸時代には、日口間で日本の領土であることが確認されているが、第二次世界大戦終了直後、千島列島だけでなく、北方四島もソ連軍に不法に占拠され現在に至っている。それまで、普通に住んでいた日本人の生活が突然奪われたのである。

戦後、樺太の真岡へ強制送還された方の体験談を読んだが、それはひどいものだった。僕は怒りさえわいてきた。不条理に、住む場所・故郷を奪われ、死と隣り合わせの生活、僕ならきつと耐えきれないだろうと思つた。苦しく辛い生活をされた方々のためにも、一刻も早く北方領土を日本に返してほしいと思う。

ただ、あわせて僕が思うことは、ロシアでもきつと北方領土はロシアの領土だと言っているに違いないということだ。僕は当然ながら、日本が正しいと思うが、ロシアの人はロシアが正しいと思つているだろう。ロシアに

はロシアなりの言い分があるはずだ。

しかし、双方がこのようにぶつかりあつたままでは進展しない。双方が理解し合うことが大切だ。そのためには話し合いが必要である。その話し合いは、お互いの「欲」をぶつけ合うだけではなく、北方領土の返還を待ちわびている日本国民の思いと、北方領土で生まれ育ち、そこが故郷になつてきているロシア人の思い、その両方を大切にするものでなくてはならない。なぜならば、領土問題の解決は自国の利益を守るためだけではなく、国同士の良好な関係を築くためでもあるからだ。

今年の十月下旬に、「北方領土進展なるか安保・経済でこに」と題する新聞記事を目にした。そこには、「互いの立場を述べつつ、双方受け入れ可能な解決策を見いだす」ことが次官級協議で確認されたことや、「様々な分野で相互依存を強めることで領土交渉の進展につなげることを狙う」ことが書かれていた。僕が希望する領土問題の解決もこの延長線上にある。仮に力で北方四島の返還を成しえたとしても、近隣諸国との友好関係は築けず、極東地域の安全環境は厳しさを増してしまう。北方四島交流事業などに見られる相互理解を深める交流も無駄になつてしまうのではないだろうか。僕は、北方領土問題を自らの問題と捉え、国民が議論を尽くすことが政府の交渉のエネルギーとなると思う。世論を背景に、日口両国が受け入れ可能な解決策を話し合い、多くの人の笑顔とともに、この領土問題が平和的に解決することを願う。

優秀賞（KBS京都賞）

返還の二文字

京都市立藤森中学校
三年 吉富 優太

北方領土問題、この作文を書くにあたって詳しく調べてみることにした。すると、自分がどれだけこの問題に關して無知であるかを気付かされた。

北方領土は択捉島、国後島、色丹島、齒舞群島の四島からなり、日本固有の領土である。

しかし、第二次世界大戦末期、日本がポツダム宣言受諾を決定したあと、戦争の混乱に乗じたソ連軍が北方領土に上陸、占領した。この時、北方領土に住んでいた島民は家を没収され、強制的に日本へ帰された。そして現在に至るまでソ連の実効支配を継承したロシアが北方領土を占領している。

僕は衝撃を受けた。島から追い出された島民がいるということとは全く知らなかったからである。このことは社会の教科書には書かれていなかったし、ニュースでも「北方領土問題の解決に向けて議論が進められている」としか報道されておらず、この問題そのものに関しては一切触れられていなかった。

これでは北方領土について詳しく調べようと思わない限りその全貌を知ることはないのではないだろうか。信じがたいことに現在では北方領土の位置さえ知らない人が三割以上にのぼるらしい。このような現状では返還は難しいと思う。ましてや、日本国民が北方領土問題に

ついてよく分かっていないのだから、当然ロシア国民もこの問題をよく知らないだろう。間違った認識をしている人だっているかもしれない。でも、自分の国が他の国の領土を勝手に占領していると知ればいい気持はしないだろう。実際ロシアでも「北方領土の実効支配は人道に反する」として日本に返還するよう求める声も挙がっている。そう、北方領土問題は領土問題であると同時に人権問題でもあるのだ。家を没収された島民は日本に送り返されるまでの間、不潔な収容所で厳しい生活を送っていた。島民に何一つ非はないのである。

ぼくは。このような事はあつてはならないことであり、許されない事だと思う。だから日本は一刻も早く北方領土返還を達成しなければならぬ。

そのためには、まずお互いの国民がこの問題を詳しく知り、考えることが大切だと思う。一部の政府の間だけ主張をしたって何も始まらない。今一度、両国が国民の意見に耳を傾け、その上で議論をする。そうすれば必ず前に進むことができるはずだ。

今も平行線をたどる北方領土問題。返還の二文字を勝ち取るためには国民の力が必要だ。

優秀賞（KBS京都賞）

今の私にできること

南丹市立園部中学校
一年 川本 杏実

「知らない」から「考えない」、だから「感じない」これが、「北方領土」という言葉は聞いたこととはあるけれど、詳しくは知らない今までの私でした。きっと私の周りの多くの人たちもそうだと思います。でも、学校の授業で北方領土について学習して、たくさんのことを知り、感じるようになりました。

終戦当時、北方四島で暮らしていた日本人は突然やってきたソ連に追い出されました。この時、人間をクレインでつり上げたりなど、人を物のように扱っていたという話を聞いてとてもびっくりしました。当時、住んでおられた人々の思いがまったこの四島には、現在自由に立ち入ることはもちろん、近寄ることすらできなくなっています。かつては多くの日本人が暮らしていた日本固有の領土は、ソ連に続きロシア連邦にも占拠されているのです。私もしこのようなことになっていたらとても悲しいし、嫌です。故郷は誰にとっても特別なものです。そして、四島を追い出された人々の気持ちは考えられなまま六十七年という長い時間がたつてしまいました。一方でこの六十七年間は、ロシアの人々にとつても長い時間でした。元島民の人々にとつての故郷は、現在北方四島に住むロシアの人々にとつての故郷にもなっています。今日本が、ロシアの人々を追い出したら、どんな

につらい思いをされるでしょう。故郷を大切に思う気持ちには、日本人もロシア人も同じだと思うのです。この領土問題がある限り、日本とロシア双方にとつて気の休まらない、つらく悲しい日々が続いてしまいます。だからこそ、この領土問題は、一日も早く解決しなければならぬのです。

私は今まで「知らない」から「考えない」、だから「感じない」し、真剣にこの問題をとらえてきませんでした。自分には関係ないと人のことのようにしてきました。そして、それはロシアの人々にとつても同じことが言えると思います。いったいどれだけの人が、この問題を真剣に考えているのでしょうか。でも、それでは何も解決しません。この問題は日本国民とロシア国民全体の課題であることと、北方四島は日本固有の領土であることを両方の国民が理解しなければならぬのです。

そのために私は「知ること」から始めていきます。日本のことだけでなく、ロシアのことも分かる努力をしていきます。そして知ったことを必ず伝えます。日本人にもロシアの人にもです。そうして、お互いに理解し合い交流を深め、日本とロシアが友好な関係を築くことが、きっとこの問題を解決する方向に導いてくれると思っています。

これが今の私にできることです。

佳作

北方領土と故郷

京都市立大宅中学校
三年 伊藤 綾香

私達人間にとつて「故郷」とは、自分の生まれ育った
思い出の場所であり、そこで出会った人々とのつながり
があつたりと、本当に大切な場所です。ビデオを見てた
くさんの人が故郷に住むのを許されないというのは本当
におかしいことだと思ひました。しかし、今、北方領土
に住んでいるロシアの方々にとつても北方領土が故郷に
なっているのも事実です。

しかし、そもそも北方領土は、江戸時代にロシアが進
出する前から日本の領土であり、ロシア自身も占領する
以前に締結した条約で認めていたはずで、それなのに、
日ソ中立条約を破棄し、それまで住んでいた人を追い出
すというのは傲慢だと思ひました。しかしそれと同時に
問題解決の際に北方領土に住む人々のことを考えねばな
らないと思ひました。

領土を国家間の争いは、北方領土問題以外にも中国と
の尖閣諸島問題など多数あります。私は最初このような
問題を解決するには国家間の話し合いが何よりも大切で
あると考へていました。しかし国家間の話し合いがあつ
てもこれらの問題が現在も未解決であることに疑問を感
じていました。でも日口間の北方領土で行われた文化交
流会の様子を見て、ただ主張し合うのではなくて、「理
解」し合うことが何よりも大切だと分かりました。一つ

一つの国を作っているのは今ここにいる私達で、その私
達の意見がより尊重されて反映されやすくなることで、
初めて意味のある話し合いとなり、早期解決に繋がると
思ひます。

私はビデオを見るまで、北方領土問題については現在
も占領されているという事実にはか目を向けていません
でした。しかし、ビデオで今に至るまでの過程を知つて
今までの考へ方がガラリと変わったので、よい機会だつ
たと思ひます。そして少しでも早くこの問題が解決され
るために、一人一人が関心を持ち、少しでも詳しく知ろ
うとして積極的に意見を発信していく必要があると思つ
たのと同時に、問題の解決によつてもたらされる結果が、
北方領土に住んでいた日本人の人々にとつても、現在北方
領土に住んでいるロシアの人々にとつても北方領土が大
切な「故郷」として互いに納得できるような結果でなけ
ればならないと思ひました。

佳作

北方領土は全国民の問題

京都市立嵯峨中学校
一年 永見 はな

北方領土、私は一度も書いたことがないほど無関心な言葉であった。今回、この作文を書くにあたって、学校で北方領土についての説明があった。このとき、私の中に疑問がわいた。

「元々、日本の領土であり、ロシアとの関わりが少なかったはずなのになぜ占領されているのか」と疑問に思う気持ちと怒りの気持ちが両方こみ上げてきた。

学校から配布されたプリントを何度も読み返し、インターネットで隅々まで調べてみた。しかし何度読み返しても、調べてもロシアに対する疑問は消えなかった。

ロシアは何か思うことがあって、このような行為に及んだに違いない。どのような思いがあったのだろう。自然に恵まれた四島がうらやましかったのか、それとも自国の領土の大きさに不満があったのか、想像してみればたかさんの思いが予想できる。しかしロシアがしている行為は、完全に条約に違反したものである。

はたしてロシアは今、四島に住んでいる子ども達に、そこがどのような場所であったのか教え、子どもたちはそのことを知っているのか、知らずに育ち、大人になれば、歴史の背景も知らないで、元からここはロシアの領土であると思ひ込んでしまう。そしてその子ども達も、知らずに育つ。これは日本でも同じことだと思ふ。

絶対に北方領土の歴史の姿を消さないでほしい。私の強い思いである。ロシアから北方領土が奪われてから二万日以上が経過したが、今を生きる私たちが、もう一度見直さないといけない大きな問題が、北方領土問題である。

どうすればロシアから北方領土を返してもらえるだろう。私はまず、お互いの文化、歴史を知り、日本とロシアの仲を深めることが第一になると思う。そして自分には関係のない問題と考えるのではなく、国民全員の問題と考えることが大切だ。私のように、北方領土に無関心であった人でも、少し理解するだけで関心をもつようになり、なんとなく知っていた人は、今まで以上に北方領土に対する気持ちが強くなると思う。そして自分の子孫に、北方領土という問題を伝えていき、国全体が北方領土について、心をむけてほしい。四島に住んでいるロシアの人も、日本人の気持ちになって、自国がしている行為が間違っていることを自分で気づいてほしい。

そして同じような過ちを繰り返さないでほしい。私は、この学習を通して北方領土を思う気持ちが高まり、大きく成長したと思う。身近な人からでも、北方領土について理解してもらいたいので、このことについて話していきたいと思う。一刻も早く北方領土が日本に返還されることを心から願う。

佳作

「北方領土」に定期航空路を開設しよう

京都市立伏見中学校
二年 清水 瑞穂

北方領土は日本固有の領土です。太平洋戦争が終わるまでは多くの日本人が豊かな自然のなかで活気溢れる毎日をご過ごしていました。しかし戦争が終わった後にソ連軍が侵攻し、島民を追い出して不当に占拠したのです。この不当占拠は約七十年が経過した現在も続いています。日本政府は一日も早い返還を求めています。しかしソ連が崩壊した後には成立したロシアも北方領土を返還しようとしません。不当に占拠された領土を取り返すことは正義に基づく行為です。私たちは島への帰還を熱望する元島民の皆さんのためにも粘り強く交渉し、返還を実現しなければなりません。

それでは北方領土の返還を実現するためには一体どうすればよいのでしょうか。私はその前提として日ロ両国民の相互理解と信頼関係の構築が必要であると思っています。なぜならば、お互いに不信感があるようでは安心して交渉ができないからです。事実、両国間では相互理解を深めることを目的にいわゆる「ビザなし交流」が行われています。しかしこの「ビザなし交流」には様々な制限があり、だれでも参加できるというわけではありません。また、船で往復することから時間がかかり、人数的にも制限があります。これでは相互理解を大きく進めることは困難です。

それではビザなし交流を充実させるためにはどのような方法が考えられるでしょうか。私は日本と北方領土の間に定期航空路が整備されたらいいなあと思っています。確かにビザなし交流の条件の緩和は難しいかもしれませんが、粘り強い交渉によって実現を目指してほしいと思います。

もちろん毎日航空機を飛ばすほどの乗客数は期待できません。しかし週に一回、定員五〇名の規模で航空路が設定されれば、一年に二五〇〇人の両国民が交流できるということになります。そして北方領土に住むロシア人にとっても日本にやってくることは大きなメリットがあるはずで、日本の最新の医療を受診したり近代的な大都会を目の当たりにすることができるからです。このことは、ロシア人にとっても日本に対する好感度を大きく増すことになると思います。

日本人にとってもメリットがあります。例えば墓参を熱望するご高齢の元島民の皆さんが船で北方領土を訪問することは困難ですが、飛行機なら比較的容易に長年の願いを実現することができます。また、豊富な海産物の輸入など、貿易を通じての交流も容易になります。両国の生徒が修学旅行で相互に訪問することができれば、将来の日ロ関係を育てていこうとする意欲をもった若者を育てることもつながります。もちろん大変困難だとは思いますが、私は一つの夢として、日本と北方領土間の航空路の設定を提案し続けたいと思います。そして第一号機に乗り込んで、北方領土を訪問するという夢をもっています。

佳作

北方領土と向き合う

京都市立西京高等学校附属中学校

二年 宮島 萌

私は北方領土のことを、私たちの国のことなのに、本当に何も知りませんでした。もちろん、それをめぐり、ロシアとの間に領土問題を抱えているというのは耳にしたことがあります。それ以上のことには何一つわかっていませんでした。自国の領土のことなのに、それでいいのか、私はそう考えて、北方領土について少し調べてみました。

すると、北方領土がさまざまな歴史、たくさんの方々の努力を経て日本の領土と認められたこと、ロシアも領有権を主張する現在、返還のため懸命な努力が続けられていることなどがわかりました。中学生の私には、よくわからない点も多かったけれど、それでもただ言えるのは、調べる前よりも北方領土に対する関心と返還への願いが強くなったということです。

私は今まで北方領土のことをよく知らなかったことを恥ずかしいと感じましたが、私のようにあまり知らない人も少なくないのではないかと思います。あるいは、知っているようで知らないことも意外にあると思います。知ってみても、その人がどう感じるかはわかりません。知ることが、直接的に解決につながる、と言うのも考えにくいでしょう。しかし、理解することから始まることも多いのではないかと思います。中学生の私にできることなど

無いに等しいし、また国民一人一人の力はわずかなものだと思います。だからこそ、一人一人の理解が必要不可欠であり、そこから気持ちも一つとなった時、大きな壁にも立ち向かえるだけのものとなるのではないのでしょうか。

当たり前ですが、お金、ましては武力を持ち出すことはあってはならないし、まず日本国の領土なのだから、その必要がありません。地道に日本の領有の証を提示していくほかないのです。その時、誰もが無責任になるのではなく、人まかせになるのではなく、北方領土とその問題に向き合わなければならぬと思います。私たち一人一人の意識を高めることで、突き動かすことができる、そう考えます。

けれども、今の状況では、個人が意欲的に理解しようとしなくても、誰もが情報を取り入れられるような環境は整えられていないように感じます。また、多くの人は、そういった情報の入手方法をよくわかっていないと思います。日本中みんなでのこの問題と向き合うには、情報を身近に入手できるような環境づくりが求められると思います。

そのような点では、日本はまだこの問題解決へのほんとうのスタートラインにも立てていなかったのではないのでしょうか。今からでも遅くはない、一人一人が理解することから始まる平和的解決への道のりがきつとある。それを一歩一歩着実に歩んでいければ、このように私は考えます。

佳作

北方領土返還を目指して

京都市立嵯峨中学校
三年 徳舛 千夏子

私は、この夏、日本固有の領土に関するニュースに釘付けとなった。八月十日、日本固有の領土である島根県の竹島を不法占拠し続ける韓国の李明博大統領が上陸した。八月十五日には、日本固有の領土である沖縄県西方の尖閣諸島に香港や台湾の活動家らが上陸した。世界中に国境線に関する問題があり、日本にも水産資源や鉱産資源の豊富さから竹島や尖閣諸島、そして北方領土について領土をめぐる問題がある。日本固有の領土についてある程度の知識は持っていたが、京都市に住む私にとって身近に感じることは少なかった。しかし、たくさんのマスメディアからの報道を見聞きして、日本国民全員が日本固有の領土について、もっとよく考えなければならぬのではないと感じた。きつと京都に住む私たちにも北方領土返還を実現させるためにできることがある。

まずは、北方領土の返還を実現させるために、日本国民全員が北方領土に関して正しく理解し、家族や友人などと話し合い、考えを深めることが大切だと考える。北海道の根室半島に連なる色丹島、歯舞群島、国後島、択捉島からなる北方領土は、全てを合わせると福岡県と同じほどの面積をもち、キタキツネなど多くの生き物が生息している。また近海では、暖流と寒流がぶつかりあい、

世界三大漁場に数えられるほど水産資源が豊富である。歴史的に見ても、一九五一年のサンフランシスコ平和条約で北方四島は日本固有の領土であることが認められている。しかし現在もロシアに不法に占拠されている。私たちは、家族や友人に伝え、意見を交換することで、この事実を伝えていきたい。

日本全体で、北方領土返還運動が盛んになり、現実のものになることを強く希望する。返還に向けて高い意識を持つことと同時に、返還が実現された時のことを考えることも重要である。現在、ロシア側と日本側が互いに理解し合うことが出来るように、日本語教員が派遣されている。

これまで私の家では、三人の高校生のホームステイを受け入れた。私の家族には英語が得意なものはないが、身振り手振りや表情で十分にコミュニケーションが取れることを体感し、互いの文化を知ることができた。今でも三人とはメールやテレビ電話を通じて交流が続いている。私はこの経験から、もちろん日本語教員を派遣して、言葉を理解しようとすることも重要だが、言葉を通じ合えない者同士でも交流を持つことで、互いに理解し合うこととする意識を持つたり、互いに分かりあったりすることが出来るのではないかと考える。例えば、中学生同士で新年や時候の挨拶をしたり、互いの文化を紹介し合うなどの交流を持つことが出来ると思う。

北方領土返還を実現させるために、私たち中学生にもできることがたくさんある。また、北方領土返還後を見据えて考えることも大切であると思う。

佳作

私の願い

宮津市立宮津中学校
三年 永井 彩花

世の中には、たくさんのもめ事、問題、争い事があり、人々の考えや思いの違いがその発端となっていることが多くあります。例え小さい子ども同士の喧嘩であっても、法に触れる事件であってもそれは同じです。そして、それらの問題を解決するのにも人の考え、思いです。それは、私たちが抱えている北方領土の問題でも同じことだと思います。

第二次世界大戦末期、中立条約を破ったロシアが不法占拠をしたのが北方領土でした。それまでは日本の領土だった北方領土ですが、今では北方領土に日本人が住むことは禁止されています。「どうして日本の領土なのに占拠されなければならないのだろう」「どうして返してくれないのだろう」「この事実を知った人ならそう思うでしょう。」

ところが、北方領土問題は国と国との問題です。ですから簡単に解決することのできない問題なのです。小学校の頃なら先生の「仲良くしようね」の一言でお互い手を取り合うことができました。しかし、国と国との問題ではそうはいきません。互いの国の利益、主張があるからです。

では、北方領土問題を解決するためには、どうしたら

良いのでしょうか。まだ子どもは現実的な解決策を持っていません。ただ、北方領土を自分の国の一部として考えを持つことに意味があると思います。

一九四五年から現在に至るまで、六十七年間もの間、結論が出ないのはどうしてでしょうか。確かに、自分の国の利益を守ることは大切なことです。しかし、そういったことだけを重視しては正しい答えが出ないと思います。私は、北方領土問題を進展させるには、思いやりや助け合いなどの美徳が大切だと考えました。きれいな事だと言う人もいるでしょう。確かに国を守るために美徳など気にしていられないかもしれませんが、互いの主張ばかりしては、少しも話が進みません。ですから「どちらかが退く」ではなく「互いが受け入れる」といった思いやりの精神が大切だと思うのです。国際協力が盛んな今、互いの国が助け合う時代になったからこそ、解決できる道が見えてきていると私は思います。

ただ、北方領土問題を解決するにあたり、大切にしなければいけないのは「地元の声」です。日本人の元島民の方々だけでなく、今島に住んでいる人々の声も大切にしなければなりません。どんな解決策でも相方が納得のいくものであってほしいと思います。

そして、いつか私たちが「北方領土」と聞いた時「北方領土問題」として思い出せる日がなく、「日本とロシアの友好の地」として思い出せる日がくることを願います。

佳作

日本の北方領土

宮津市立日置中学校
三年 一色 菜奈

私には関係のないことだと思っていた北方領土問題。社会科の授業でこのことについて学習するまで、深く考えたことがありませんでした。北方領土と言え、歯舞群島、色丹島、国後島、択捉島。私は全て日本の領土だと思っていました。授業で北方領土問題についてこれまでの歴史や、なぜロシアの領土か日本の領土かで問題になっていくのかなどを学びました。それでも、私は北方領土は日本の領土だと思いません。なかなか解決しない北方領土問題。返還を望む人はたくさんいます。でも、今まで私は返してほしいという思いは、あまり持っていないでした。

しかし今回社会科の学習を通して「北方領土が日本の領土になって欲しい、返して欲しい。」という思いを持ちました。その理由は前に北方領土に住んでいた人、そこで生まれ育った人が自分の故郷に自由に行ったり来たりできないことやお墓参りにも行けないという事実を知ったからです。北方領土問題と聞いてもそんなことは考えたことは一度もありませんでした。だからこそ、今回聞いてとても衝撃を受けました。

北方領土には昔、約一万七千人の日本人が暮らしていました。しかし島民は強制的に島を追い出され、樺太などで非常に苦しい生活を送った後、昭和二十二年から二

十四年にかけて引き揚げさせられました。このように酷い扱いをされたうえ、自分の故郷にも自由に帰らせてもらえないなんておかしなことです。なんで自分の故郷に自由に行っては駄目なんだと強く思いました。

今、日本では北方領土返還運動が行われています。その中で一番印象に残った運動は「ビザなし交流」です。かつて北方四島のロシア人住民は、日本が主張している北方領土問題について知らなかったり、日本や日本人に対して間違った印象を持っていたりする事が少なくなかったと聞きました。

しかし、ビザなし交流によって両者の直接対話が実現し、ロシア人住民が日本の文化や家庭に直に接したことで誤解が無くなり、北方領土問題についての日本の主張を知ることができたそうです。さらに、日本側からも北方領土が返還されたらロシア人住民と一緒に住んでもよいという声が上がると、友好的な雰囲気の中で交流が積み重ねられているようです。

日本人やロシア人住民同士では良い雰囲気でも交流をしているのに、国同士ではどちらの国も自分の領土だと言い張っているだけで、解決する見込みはまだ立っていません。戦後六十七年たった今もまだ残る北方領土問題。国民はいち早く解決することを望んでいます。お互いの国が北方領土についての正しい知識を持ち、どちらかの国が不利にならないように良い解決方法を国同士で話すべきだと思います。そして、いつか北方領土が日本の領土になり、両国の関係が友好的で豊かになっていくとよいと思います。

佳作

北方領土問題について

宮津市立養老中学校
三年 小島 慎司

北方領土は、北海道の北にある択捉島、国後島、色丹島、齒舞群島のことだ。北方領土は日本人によって開拓され、日本人が住み続けていた島々だ。しかし、現在は一九四五年第二次世界大戦終了直後にソ連（当時）によって不法占拠され、日本人が住めない状況になっている。そして今も日本は、固有の領土である北方領土の返還をロシアに求めている。

ロシアが、日本の領土である北方領土にこだわるのは次のようなことがある。

一つはロシアにとって重要な軍事拠点となるからだ。アメリカを中心とする資本主義諸国とソ連を中心とする社会主義国家が対立していた冷戦時代には、ソ連の海は冬場は凍結し、軍艦が外海に行くことができず、致命傷となりかねなかった。

もう一つは、北方領土周辺の海域はサケやカニ、ホタテなど漁業資源が豊富だからだ。この漁業資源だけで、今もロシアは年間十億ドルの収入を上げている。

このような、日本とロシアの北方領土問題を解決するにはどのようなことをすればよいだろうか。

まず日本とロシアの両国が領土問題について真剣に話し合うべきだと思う。両国は、これまでも様々な条件を付け合って北方領土問題を解決しようとしてきている。

でも、両国ともこれまで合意したことはない。つまり、今までの案もそれぞれの国が求めている条件ではなかったのだ。だから、これから先、両国が納得のいく条件に近づけていく努力をすればよいのだが、今の日本とロシアの関係と昔の日本とロシアの関係からするとそう簡単には、解決まで持ち込めないだろう。

僕はこの作文を書くまでは、北方領土のことについて詳しいことは全く知らなかった。でも、作文を書くために資料やインターネットで北方領土について調べると、いつ、どのようにしてロシアに占領されてしまったのか、なぜロシアは北方領土を日本の領土だと認めていないのかなど詳しいことをたくさん知ることができ、領土問題について関心を持った。おそらく国内でも北方領土の事について詳しい知識を持っている人は、そんなに多くはないと思う。

だからこそ、今回の僕のように領土問題に少しでも触れ、考えるようにしてほしい。そして、国民は自分たちの国の問題なのだから一人ひとり北方領土問題について意思を持ち、国が全体となって考え、話し合うことが大切だ。

佳作

北方領土

京都府立鳥羽高等学校
三年 近藤 実

領土問題は、今、私たち日本国民が考えなければならぬ最も重要な問題の一つである。なぜなら、昨今、日本周辺の国々で領土問題をめぐる運動、活動が活発化し、激しくなっているからだ。今、問題をなっている領土には尖閣諸島、竹島、そして北方領土がある。最近では尖閣諸島について、中国国内では反日デモが連日行なわれ、中国にある日本企業の店や商品が被害を受け、さらに日本領海に中国船が侵入するなどということが起こった。また竹島については韓国大統領が竹島に上陸し、竹島の領有を主張した。このようなことで尖閣諸島、竹島に関しては、問題が表面化し、日本人々もこの二つの問題については、関心を持ち、考えているだろうと思う。

しかし、北方領土問題も忘れてはならない重要な領土問題である。国後島、択捉島、歯舞群島、色丹島から成る北方領土は、今だかつて他国の領土となったことがない日本の領土であるが、現在はロシアの施政下にある。北方領土の島々はかつて日本人が住み、日本が統治してきた領土であり、ロシアの日ソ中立条約の一方的な破棄によって奪われた領土である。だから北方領土の日本領有は主張し続けなければならない問題であり、また、ロシアの施政下にあることを許してはならないと考える。領土問題を解決するには、国民の理解と協力が絶対的

に必要である。しかし、日本人々は領土問題に対する関心、また、尖閣諸島や竹島、そして北方領土が、自分の国の領土だという意識が欠けているのではないだろうか。実際、私自身、周辺国で起こった反日デモや、上陸などの事件が起こる前は、あまり考えたこともない問題だった。

しかし、それではいけない。自分の国の抱える問題を、他人事として考えてはいけない。なぜなら、日本の領土を守るのは、日本人であるからだ。それはナシヨナリズムに走るといっわけではなく、私たち国民の意思が日本の意思であるからだ。日本において、主権は国民にあるから、日本を動かすのは国民であり、その責任も国民にある。私たちの意思は一票となり、または世論となって、政治に反映される。領土問題の解決には、世論が重要なカギとなる。だから、私たちは、領土問題に関心を持ち、一人一人がこの問題に対してきちんとした意見や考えを持つべきであると考える。政府が毅然とした態度で臨まないからだという人もいるかもしれないが、政府を選ぶのも国民の意思である。

私たちは、もっと自分が日本という国の一部だということを感じ、日本が直面している問題に目を向けていかなければならない。その一つである北方領土問題に關しても、もっと関心を持ち、正しい知識を得る必要がある。そのことが、問題解決の第一歩となると信じている。

佳作

北方領土問題について

京都府立須知高等学校
二年 林 沙紀

北方領土って聞くと、自分の中ではあまり良いイメージはありませんでした。というのも、今まで聞いてきた北方領土のイメージは、元々ロシアだった領土を日本が奪い、またそれをロシアが奪ったというもので、そんな土地はロシアにわたしてしまえばよい話だけなのに、と思っていました。

けれど、北方領土問題についてきちんと理解し、元々から日本の領土だったと分かった今、ロシアは日本に北方領土を返還すべきだと思います。しかも、日本とロシアの両国が納得できるかたちで、平和的に。そこまですてこそ「返還した」ということになると思います。

なぜなら、歴史的にも北方領土が日本のものであると証明されているからです。(北方領土問題対策協会冊子) 今まで、日本とロシアとの間で、日魯通好条約、樺太千島交換条約、ポーツマス条約などが結ばれてきました。この公式な条約の中で、北方領土がロシアの領土になったことは一度もありません。国際的に見ても北方領土は日本のものであるということがわかります。なので、ロシアが北方領土をロシアの領土だと主張するのはおかしいのです。

ところで、平成四年から旅券、査証なしで北方領土へ行けるという北方四島交流が始まっています(外務省HP)。元々北方領土に住んでいた方や、その子孫の方に

とってはありがたい交流だと思えます。しかし、よく考えてみると、日本人が日本を旅行するのに旅券や査証は必要でしょうか。それを考えると、北方四島交流のルールとして「旅券、査証なし」と言わざるを得ない事自体が少しおかしいのではないかなと私は思います。

私が今、思うには、北方領土を返還してもらおう前にまず、北方領土に住んでいた方やその子孫の方々が、交流会などの特別なとき以外でも自由に往たり来たりできるような仕組みを考えていってほしいということです。

現在、北方領土には、ロシア人が三世代に渡り生活をしていきます。彼らにとってはまぎれの無い故郷であると同時に、日本にとっても手放すことができない領土です。自由な交流を通して、ロシアの人にも、元々は日本の土地だったことを知ってもらえる機会も増えていくだろうし、何より、その土地に住んでいる人、住んでいた人がもっと多くの交流の機会を得ることができ、この北方領土問題が平和に、早く解決する糸口になるのではな

いかと思うからです。

これらの事から、北方領土は日本の領土であるので、ロシアはいち早く北方領土を日本へ返還しなければならぬと思うとともに、北方領土問題について、戦争などの争いごとで解決するのでなく、法やきまりに基づいて平和的に解決することがこの問題の真の解決であると思

発 行

平成25年（2013年）2月2日

北方領土返還要求京都府民会議

〒602-8570 京都市上京区下立売通新町西入藪ノ内町
京都府広報課内

京都府北方領土教育者会議

〒622-0051 京都府南丹市園部町横田3-5-1
南丹市立園部中学校内

